

まえがき

本書は 2002 年 4 月に刊行した『ネットワーク社会の情報リテラシ』をもとに、OS を Vista に、アプリケーションソフトを Office 2007 に対応させるとともに、幾つかの重要な章を追加し、新たな執筆者も加わって全面的な書き換えを行ったものである。

執筆に当たっては、新しい環境に即して改善を図った点も多くあるが、想定している読者や、どのように読まれることを期待しているかなどの基本的な方針は変わっていない。なぜならば、前書が依然として新たな読者を得て増刷刊行され続けているからである。とはいえ、本書が単なる衣替えではないことは、前書に引き続き読まれる読者はすぐに実感されるはずである。

改めてここに前書での記述を繰り返しておきたい——著者たちが念頭においている本書の読者は、情報リテラシに興味を持ち、コンピュータを自由自在に扱えるようになりたいという意欲を持ちながら、コンピュータの前で途方に暮れているコンピュータ初学者である。いうまでもなく大学生だけではなく、社会人も含めたすべてを対象としている。

さらに、前書から継承しているのは「知らない言葉（概念）を言葉だけで説明することは困難である」という認識である。したがって、大学などの利用に際しては座学としての講義ではなくコンピュータを前にした演習ないしは実習を想定しており、たとえば一連の手順は極力ていねいに述べることにしている。しかしながら、単に困ったときに簡単に解決策を示してくれるハウツー・マニュアルを狙っているわけではない。

情報リテラシの厳密な定義はここではしないが、長年大学での情報教育に携わってきて得られたある確信ないしは経験則がある。それはいつまでも初心者から脱することのできない学生共通の特性についてである。価値あるモノ、有用なモノを手に入れるにはそれなりの対価を支払う必要があるという明白な事実を認めない、あるいはまったく逆に、ひたすら我慢（努力）すればできないことはないと信じて疑わないことである。実は本書が期待していることは、そのような思い込みに支配されている読者が、「わかりやすさ」への過剰な期待と不合理な忍耐の間の陥穰（かんせい）にはまり込むことなく、情報リテラシを身につけるための訓練に十分な時間を充て、そのときに傍らに置いてじっくりとつきあってもらえることである。その十分な時間を「失敗」とつきあい上手になるために費やすことが必要なのである。あえて訓練という表現を使うのもそれを念頭に置いているためである。

Windows XP と Office 2003 になじんでしまったために、新たな OS やバージョンアップに

ついて行きにくいという声を耳にすることが多い。それは私たちの情報リテラシ教育についての基本的な考えに対する告発である。本書をOSやアプリケーションの新バージョンへの手引きとして読まれるのは本意ではない。著者らは前書でリテラシを学んだ人には、本書に頼ることなく新バージョンのOSとアプリケーションを使いこなせることを期待したい。つまり、そのような能力をこそ、前書に引き続き本書でも読者が身につけることを期待している。

新バージョンはさまざまな面で進化している。特にユーザインターフェースの基本的な設計思想が大胆に変更されており、それは正しい進化であると考えている。前書の読者がその進化に容易に適応できるならば、あるいは少なくもそれらの変化に積極的に挑むならば、著者らの意図は達成されたことになる。

本書ではじめて情報リテラシに触れる読者には、これらの前書に対する言及は奇異に感じるのことと思うだろうが、実は本書のエッセンスがそこに浮かび上がることに気づいてほしい。つまり、著者らは読者が本書に書かれている知識や技術を習得することだけでは満足しない。本書を片手に、じっくりと取り組んだ訓練の後に起きる読者の変化こそが肝要であり最大の関心事である。その変化は上に述べた新バージョンのOSとアプリケーションに抵抗なく取り組める能力として発現するはずである。

新たな能力を手に入れるには当然そのためのコストを引き受ける必要がある。記述内容の理解しにくさを著者らの責任に帰すことはもちろん可能であるが、それを乗り越えるべき試練であると考えて、じっくりと取り組み、あれこれと試すことを期待したい。それを章ごとに繰り返すことで、著者らの期待する能力を獲得する読者は、きっと次の新バージョンに対面したときに、新しい環境に積極的に取り組んで進化の成果を存分に享受するはずである。そして、そのような行動様式を導くことこそが情報リテラシ教育の本質であると確信する。技術が革新を続け、社会が変化し続けるならば、リテラシ教育はその時点で望まれる環境適応能力のみを視野に入れるだけでは責任を果たしたことにならない。来るべき変化に適応する能力の付与をこそ引き受けなくてはならない。本書ではそれを達成すべく構成と編集を進めてきた。本書を手元に置く必要がなくなった後の読者の変化を期待したい。

なお、教育機関などで本書を教科書として採用いただいた先生には、講義で利用できるよう各章のスライドファイル（Microsoft PowerPoint形式）を提供している。入手法は出版社にお問い合わせいただきたい。

2009年3月

著者一同